西湖のほとり

わたしにとって中国とは

尾崎秀樹 著

西湖のほとり

わたしにとって中国とは

尾崎秀樹 著

閣書
斐
有
選

西湖のほとり　　＜有斐閣選書＞

昭和54年10月20日　初版第1刷印刷
昭和54年10月30日　初版第1刷発行

¥1,300.

著　者　尾崎秀樹

発行者　江草忠允

発行所　株式会社有斐閣

東京都千代田区神田神保町2～17
電　話　東京(264)1311(大代表)
郵便番号〔101〕振替口座東京6-370番
本郷支店〔113〕文京区東京大学正門前
京都支店〔606〕左京区田中門前町44

印刷　秀好堂印刷・製本　高陽堂製本
© 1979, 尾崎秀樹. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

1326-082300-8611

西湖のほとり　目次

I　西湖のほとり

第二の文芸復興
——四人組追放後、復活した中国の作家に会って　2
兄秀実の上海時代　13
「紅岩」の舞台　24
重慶の街で　30
評弾界の盛況　35
延　安
——革命の聖地　39
西湖のほとりで　55
西安・洛陽の旅　68
紹　興
——魯迅のふるさと　76
日本人の中国旅行記　84

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

II　わたしにとって中国とは

毛沢東の詞　96
周恩来と酒　102
樟のりっぱな館　106
郭沫若に学ぶ　110
二つの壺　115
満鉄
——歴史の幻影　118
戦争文学寸感
——国境のうちとそと　129
ヴェルダ・マーヨのこと　137
山中峯太郎と中里介山　147
尾崎秀実と風見章　169

白川次郎のこと　188
植民地における国語教育
——その序説的な一章　201
絃仔の音色に　211
わたしにとっての台湾
——その歴史の負債　217
あとがき

I

西湖のほとり

第二の文芸復興

――四人組追放後、復活した中国の作家に会って――

四人組追放から一年半たち、中国の文芸界はどのように変わっただろうか。中国を旅行中、できるだけ多くの文芸家に会い、その人々のなまなましい声に接してみたい――これが私のいつわらない気持だった。

一九七八年の五月から六月へかけて中国を旅した。日本作家代表団の一員としてである。一九六七年に行ったときには、「造反有理」を叫ぶ紅衛兵の波だった。七一年にはその激動の嵐はおさまり、『毛沢東語録』を口にする人も少なくなっていたが、まだその余波は残っていた。北京の頤和園（いわえん）を訪れたとき、仏香閣を見上げるあたりに大きく掲げられた林彪の語録を、そぎ落としているのを見かけた。林彪の失脚を知ったのはその後まもなくのことだ。

それから七年たった現在、中国の様相は一変していた。大衆の中に日常の暮しがもどってきた感じである。人々は口をそろえて「中国は新しい長征に入った」という。革命を継続し、階級闘争、生産闘争、科学実験に力をいれ、今世紀の末までに〝四つの近代化〟を実現するというのが、当面の課題

とされている。

▼書店の前に徹夜で行列する人々

文芸界にも「百花斉放、百家争鳴」の気運がみなぎり、プロ文革の過程で姿を消していた多くの作家・評論家たちが、公私の会にあらわれるようになり、執筆活動も活発化しようとしている。そのひとつのあらわれとして、この五月二七日から六月五日にかけて北京で開催された中国文学芸術界連合会の拡大会議において、中国作家協会、中国戯劇家協会、中国音楽家協会などの復活が決定され、『文芸報』も復刊されることになった。多くの文芸家と北京で再会できたのも、この会議に出席するために、各地から集まってきていた作家たちが多かったからだ。

『人民日報』の六月六日号にはその詳細が報道されており、発言者や参加者の中には、茅盾、周揚、巴金、夏衍、劉白羽、曹禺、欧陽山、張天翼、呂驊、馮至、周立波、艾蕪、草明、厳文井、李何林、馬烽、陳登科、馮乃超、成仿吾、沙汀、謝冰心、李季、周而復、楊沫、曲波、楊益言など、おなじみの名前もまじっていた。

病床にあった郭沫若は、祝賀の文章を寄せているが、おそらくそれが絶筆となったに違いない。

古典や外国文学の翻訳も復活し、姚雪垠の『李自成』や孟偉哉の『昨日の戦争』など、ベストセラーとなっている作品も多い。北京在住の安藤陽子さんに教えられて、六部口の郵便局へ行ってみたが、ここには各地で出版されている定期刊行物がずらりと並んでいた。『人民文学』や『文学評論』をはじめ、『青海文芸』『遼寧文芸』『天津文芸』『安徽文芸』など各種の月刊誌をひろげてみると、その盛

況がじかに伝わってくる。

おまけに街頭を歩いていると、書店の前に長い行列ができているのをみかけた。ときには売出しの前夜から並ぶ人もいるらしい。店頭にはシェクスピアやチェホフの作品もあり、マーク・トウェンの翻訳も出たと聞いた。汽車の中では『儒林外史』を熱心に読んでいる人がおり、たのんでちょっと見せてもらったが、それも新しい復刻本だった。中国社会科学院文学研究所編の『唐詩選』をもらったが、それは中国古典文学の叢書になっており、ほかにもいろいろ出ている模様だった。

書店の前の行列をみながら、私は戦後、『善の研究』などを買うために並んだ昔を思い出した。帰国した翌日、日生劇場の前を通って、「風と共に去りぬ」の前売券をもとめるために長蛇の列ができているのを見たが、中国の人々の方がより切実なものを感じさせた。

若者たちの表情も明るく、上海の黄浦公園を夜一〇時過ぎに散歩したときなど、アベックがあまりにも多く、頬をすりよせるようにして河を眺めている姿に、こちらがあてられる思いだった。四人組時代には知識分子は「臭老九」、つまり九番目のはなもちならないヤツのレッテルをはられ、地主、資本家や特務、裏切者などとともに批判の対象になったというだけに、インテリたちはずいぶん苦労が多かったようだ。しかし今ではすっかりその暗雲も消えた。

▼あまりにむごかった文芸破壊

文革後きびしい批判をうけ、四人組によって槍玉にあげられていた評論家の周揚氏とは、中日対外友好協会の事務所で会った。上海文芸界の大物である巴金氏は、わざわざ団長の井上靖氏をホテルま

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

周揚先生と会う。手前は水上勉氏。北京の中国日本対外友好協会で。

で訪ねてくれたし、謝冰心、厳文井、孟偉哉の諸氏も足を運んでくれた。四人組の迫害によって眼が不自由になり、片脚を骨折した夏衍氏は、杖をつきながら私の部屋まで訪れてくれたし、姚雪垠氏とも宴席で隣りどうしになり、いろいろと話を聞く機会にめぐまれた。

そして四人組による文芸の破壊が、いかに理不尽なものであったかを、それらの人々から教えられた。周揚氏は四人組の〝黒い路線〟にふれて、「大きな組織の中には必ずひとにぎりの野心家が出るものだ」と語っていたが、それは反面教師というにはあまりにもむごいものだったようだ。

私は周揚氏と会ったのははじめてだった。文芸政策の面で指導的な地位にあった当時の彼は、公式主義的な印象を日本人の一部に与えたようだが、すっかり角がとれ、過去一〇年間の文芸面のひずみについて語る口調もおだやかで、苦渋を裏に秘めているように思われた。

周揚氏が批判されたのは一九六六年七月のことで、以後、周揚および周揚グループにたいする批判はつづき、とくにその批判の焦点は、抗日戦争前夜、上海の文芸界を二分したいわゆる国防文

学論戦と、『魯迅全集』（一九五八年、人民文学出版社版）第六巻の注にしぼられた。これらの問題がどのように結着がついたのか、本人の口から聞きたいと願った。その答えは――。

「四人組は史実をゆがめた。彼らは魯迅先生に反対するよう仕向けたのは、上海党部の地下党員であり、それは陰謀集団だったとまでけなしたが、今やその問題は解消した。文革の一〇年間の調べによって、〈国防文学論〉を提唱した分子は悪いグループではなく、魯迅先生らの提唱した〈民族革命戦争の大衆文学〉とともに、抗日戦のたかまりの中では、全人民の共通したスローガンだったことがあきらかになった。もちろんそこには派閥が介在し、左右日和見主義の欠点もあった。とくにプロレタリアートの主導権の点で、未熟さがふくまれていたことは事実である。つまり二つのスローガンは人民内部の矛盾であり、これまでいわれたように王明路線との結びつきは時期的にあり得ない」

私はその言葉を聞きながら、何かもどかしさを感じていた。それはひとつには、私の不勉強のせいでもあるが、事実関係をもっと知りたいという欲求からもきていた。

『魯迅全集』の注に関しては、はっきりした形では結論がでていないふうであった。

▼マイナス面までも自由に語る

三〇年代作家のほとんどが異端訊問に付され、隔離審査をうけ、抗日戦や解放戦争に従事した作家たちも、小さな傷を理由として、ときには無実の罪をきせられて、投獄されたり、思想改造のための幹部学校に送られた。周揚氏は隔離審査をうけた一人だし、上海の杜宣氏は投獄され、巴金氏は幹部学校に送られたと聞いた。

「今思い返すとこわい夢をみたようなものだ」という巴金氏は、しかし四人組追放後、作品を書きたい思いでいっぱいであり、八〇歳までに（現在七四歳）ゲルツェンの翻訳を終えて、さらに二つの長篇といくつかの短篇をまとめたいと語っていた。それらの長篇は一九二〇年代の知識人の歩みを主軸としたもので、自伝的色彩のつよい作品になる予定らしいが、構想はまだできあがっていないという。

「ためらいをみせる作家も多いが、困難をおそれず、矛盾をこえて、現代の諸問題ととり組むようにすすめている」と公的な立場で発言したのは周揚氏だが、セキを切ったように仕事を再開する作家がいる半面、ふかい心の傷からまだ立ち直れない人もあるようだった。また四人組時代の意識にわざわいされて、立ち遅れている作家もいるらしい。これまでと違うのは、そういったマイナス面までも自由に語ることができる点だった。

『李自成』の作者である姚雪垠氏は、すでに第一巻上下、第二巻上中下の五冊を出版していた。全部完成すると三百万字になるという歴史の大河小説だが、六八歳の高齢とは思えない筆力をしめし、毎朝三時に起きてマラソンをし、体力を養って一日八、九時間は執筆にあてると語っていた。

頭は真白で眉は太く、やや眉根をよせた表情は、いかにも歴史大作の書き手らしくどっしりとしており、口調も重々しかった。よく聞きとれなかったが、河南省の出身で、一九三〇年代の後半には創作活動に従ったベテランであり、『李自成』はそのタイトルがしめすように、明末の農民蜂起の英雄を主人公とした大河小説だ。

第一巻はすでに六三年頃までにまとめられていたが、四人組の要求をつっぱねたため出版できなかったという。私はまだ読んでいないが、ベストセラーにランクされ、各地でこの作品をめぐって討論

会が行なわれ、諸雑誌でも論及されている。今年の四月に出た『文学評論』（隔月刊）では茅盾が論評しているし、二月の『上海文芸』には、秦牧の評論が載っている。

▼哀しみを浮かべる老舎未亡人

孟偉哉氏の『昨日の戦争』は、作者から寄贈されたが、第一部上下は『李自成』に劣らぬベストセラーで、なかなか手に入れにくいそうだ。内容は朝鮮戦争を背景に、中国の人民志願軍の英雄的な活躍を描いたもので、とくにその青年指揮官である周天雷の行動はきわだっていた。

孟偉哉氏は四五歳の壮年作家、謝冰心女史のお嬢さんと同じ年齢だという。太原の出身で、父親は抗日戦の勇士だったそうだ。六歳のときに日本軍の侵入を体験したが、まもなく閻錫山の部隊に父は殺された。「幼いとき何度日本軍の兵士から銃を盗もうと企てたかわからない」と告白していたが、その戦争体験がやがて抗米援朝戦争へ志願する大きな動機となったのであろう。

朝鮮戦争に参加して、頭や背に火傷をおい、一週間ほどは失明状態がつづいたという。片方の耳は今でも不自由らしく、何度か聞きただすようにした。南開大学に学んだのはそれ以後のようだ。

「私は四人組追放前を解放前、それ以後を解放後とよんでいる」と語っていたが、寧夏回族自治区にある砂漠の幹部学校で働いていたこともあるらしかった。

『林海雪原』の作者・曲波氏もおおいに活躍中で『山河は叫ぶ』という長篇が出ていると聞いたが、それ以上の消息はわからなかった。抗日戦を主題としたこの長篇も、よく読まれているようだ。四人組時代に話題になった「智取威虎山」は、『林海雪原』からとったものだが、原作者の名前はどこに

胡絜青女史（右端，国画家）と会う。女史は老舎未亡人である。

も記されず、彼自身もきびしく批判されていた。上海で講談家（説書人）の唐耿良氏が、『林海雪原』の抜き読みをやってくれたのは、まことにたのしかったが、これも曲波文学のよみがえりのひとつのあらわれだろうか。

そういえば大衆的な語りものの筆法をたくみに生かした趙樹理にたいしても、名誉回復が行なわれ、近く『李有才板話』なども復刻されると聞いた。大同で会った一人の労働者作家は、尊敬する作家として老舎と趙樹理をあげ、大衆性に富んだ語り口に学びたいと告白していたものである。

自殺した老舎の未亡人と、そのお嬢さんにもお会いし、当時の事情をうかがった。老舎先生と交渉のあった井上靖、水上勉両氏が、墓参をしたいと申し入れたのにたいして、未亡人の胡絜青女史（国画家）がわざわざホテルまで訪ねてくれたのである。老舎との思い出を井上氏は「壺」に書き、水上氏は「こおろぎの壺」に述べている。そこに描かれた老舎像はいかにも庶民の作家というにふさわしい風貌であり、私の記憶にもあざやかだった。

それぞれの故人にたいする思い出が語られたあとで、ぶしつけな質問ではあったが、「老舎先生は自殺されたようにうかがいま

したが、そのおり遺書はあったのですか。そのように伝えた新聞を日本で読みましたが……」と、同席した一人がたずねた。「そういうことは知りません」と答えた未亡人の表情は哀しげで、悪夢の日日を思い浮かべるかのようだった。私たちはそれ以上、質問する気になれず、わずかにその日が八月二三日（『人民日報』によると二四日）だったことだけを確認した。

だがそれから何日もたたない六月三日には死後一二年ぶりに北京西郊の八宝山革命墓地で、盛大な納骨式が催され、茅盾氏が墓地で故人の遺業をたたえたと新聞に出ていた。やっと老舎も安らかに眠ることができることだろう。

▼戸惑いを見せる日本文学研究

北京ではかなりな数の日本文学研究家と会った。日本の文学事情について聞きたいという注文で、私は中日対外友好協会の事務所へ出かけ、そこで半日を過ごした。これまでの二度の訪中ですでに顔見知りの人も何人かまじっており、通訳抜きで膝つきあわせて話しあった。「太郎、次郎、三郎」とか「三村時代など」といった、週刊誌仕込みの知識までが入っているのには驚いたが、そういった責任の一端は私たちにもあるわけで、おおいに恥いった。中国へ行く直前に出版された森村誠一の『東京空港殺人事件』を読んでいる人がおり、「あの解説は尾崎先生でしたね」といわれた。

はじめ二時間ほどマスコミ文学の動向について説明し、戦後文学の中でそれがどのように位置づけられるかを語った後、夕刻まで質問をうけた。それこそありとあらゆる質問がとび出すありさまで、内向の世代について聞かれるかと思うと、横溝正史ブームの本質は何かと問われ、そのたびにサイク

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook